アートプロジェクト作品の研究制作

大阪芸術大学　教養課程　講師　加 藤 隆 明

プロジェクト作品というものを通し、じしんの作品を考察した。現在日本各地方でアートプロジェクトが展開されている。その多くは、地域活性化や観光、経済活動を重視しているように見える。また、都市部でのアートプロジェクトはフェスティバル的要素が大きく、都市内にて通常起こりえないであろう異化されたコミュニケーションの場を提供しているのであろう。

プロジェクト作品の特徴として、プロデュースされた展覧会には運営者の役割と選択された作家のプロジェクト作品が複雑に絡み合い単純に展覧会や作品の構造は説明しにくい。そのようなことから各々の作品は一概に様式化できないようにも思える。個人発信のプロジェクト作品とは異なるものがある。

批評の観点から見ると、制作システムから作品、作家、様式の同一固定化が重要な芸術批評からも距離があり、多様化されるアートプロジェクトはその対象となりえるのだろうかとも思える。

じしんの経験に戻すと 1980 年初頭から作品発表を行ってきたが当時はまだプロジェクトと明確に呼ばれる芸術作品は存在していないように思える。たとえばアースワークがどうしても作品本体より制作経過を記録しそれを美術館やギャラリーで展示することはあるがプロジェクト概念を明確にはしていなかった。

1980 年代ドイツの世界的アーティストであるヨーゼフ・ボイスが来日した。アメリカ現代美術に親しんでいた私には、難解でよく理解ができなかった。国際的なアートイベント・ドクメンタ 7 での作品に「7000 本の樫の木」がある。内容はドクメンタから次のドクメンタまでの間に 7000 本の樫の木の植樹とそれと同じ数の玄武岩を並立し設置するというものである。ボイスの来日は多くの若者に影響を与えた。彼はドイツの政治経済文化の多様な世界観を取り巻きながら表現し続け、人間の生きるべき壮大な世界と幸福の現実のために社会運動、それをまた芸術行為としてきたと私は考えている。また「すべての人は芸術家である」という魅力的謎めいた思想がありそれは「芸術を生み出す源泉はすべての人が持ちうる」ということなのだろうかと私は想像している。そのボイスの言葉がプロジェクト行為を芸術とする保障のようにも思えてくる。

その後、展覧会や講演会などでプロジェクト構造の行為を私たちが経験していき、そのことで作品として理解してきたように思う。もちろんハプニングやパフォーマンス、アースワーク、コンセプチュアルアート等の芸術運動を経験しプロジェクトという概念を理解していくと思うが、当時はその思想は明確ではなくまだ「アートプランニング」的な曖昧な構造であったと思う。

現在のプロジェクト作品は、博物学的手法や社会学的分析での展示方法などで、展示空間に映像や造形、パフォーマンスなど、以前では一つの確立した表現様式（メディウム）であったものが、アーティストの表現したいものを補完しあうものとして展示されている。そして展示された表現媒体の体験を鑑賞者が各自の編集力により完成されるという構造になっている。多様にちりばめられたテクストを鑑賞者自身が再度織り上げることで鑑賞としてきている。

現在のプロジェクト作品の発表では、プロジェクト作品は日常的場所での活動展示なので法律等の約束事に接することになる。

過去の体験であるが、鉄板で制作された壁がギャラリーから外の歩道まで飛び出した作品。当然警察の指摘を受けたことが新聞に掲載されていた。近年路上での制作行為を記録媒体等も含めての展示をギャラリーで見た。公共空間を管理している役所からの許可証が展示してあった。作品は公共性を問題にしていたために尚更であった。公共性をリアルに捉えるために関連各所の書類というものが重要になり、それも作品となる。

最近のプロジェクト中心のアートイベントでは、展示作品に寄り添うように説明補助のためのサポーターがいる。基本的には作品の保護という役割もあるだろうが、作品の鑑賞方法に不慣れな人たちに、作品の見方を語りつつアート作品のファンになってもらおうということだろう。対話式鑑賞という方法も実践されつつあり、サポーターの役割にもそれが期待されているのだと思う。

私は素材の世界観は「Pigskin(豚真皮)とは何か」という問いを重要視してきた。彫刻とは物質を使用し人間のイメージを投影する事から始まったといえる。元来彫刻はフェティシズムであると考えている。そしてそこからの脱却「本来的物体」として捉えること。人と支配関係のない物体の在り様の考察が Pigskin を選択した理由である。その支配関係の無さとは私のからだ組織と同質であることにある。手術後の縫製糸が Pigskin であり、それは人間と同等の素材でもありそこには「支配する一支配される」での関係はないと考えた。これを作品の基礎に置き作品の展開をしてきた。

この Pigskin シリーズに制作途中に他者の介入により成立させる作品があった。制作途中に他者の触覚により最終形態が変化するもので、制作手順が明確にあり、それに従い行うものである。触覚どうしの絡みが曖昧な存在としてある。

また、現在のアートプロジェクト作品の様な地域性や文化、政治、経済のように観客との共有性ではないが物質という古典的素材との共有性によりプロジェクト的作品が可能かを考えていた。

研究は上記の様な内容であった。じしんの作品等については提出資料にて掲載する。